

最近の お墓事情

番地銘石代表取締役社長

番地常夫



奈良西大寺 釈尊五輪塔にて

さて、最近とはいつ頃の時間を指すのでしょうか？一年か十年か百年か千年か？それによって、忙しい毎日、世代交代の時期、自分の祖父母や曾祖父母の時代などと、感じる範囲が変化します。京都の古い家では、先の戦(いくさ)という、冗談ではなく15世紀の応仁の乱を指すのことで。最近？のお墓のデザインは自由で華やかなものがあります。そのスタートはキリスト教のお墓のスタイルを和風のアレンジしたことから始まったようです。

(1)西洋と日本のお墓づくりの大きな違いは、そこに入る人が一世代か数世代かにあります。西洋のお墓は自分と奥さんで完結し、子供たちは別の場所に新たに建てる人が多いようです。日本では伝統的に先祖代々というようにそこに縁が

続く限りずっと祭るといふ期待をこめています。

民俗学者の柳田國男が一九四五年十月に発表した「先祖の話」では、海外から仏教、儒教などが伝わる前から、日本人の中に強く流れる意識について述べています。歴史書には書かれていないけれど、各地に残る伝承や風俗の中に、子孫の永続と繁栄を願う縁者達(靈魂)の存在を記しています。(先祖教―先祖の話六四節死の親しさ 手塚治虫の火の鳥太陽編にも同様の内容があります)

(2)日本人は宗教心が薄いと言われることがあります。本当にそうでしょうか？民族大移動ともいべきお盆の帰省ラッシュの大義名分は、お墓参りです。ある西洋人は述べました「すばらしい！日本人は家ごとに教会を持つている、仏壇はポータブルチャーチだ。」このほか、結婚式、初詣、地鎮祭、初午、宵宮、葬式、はたまた若者に意外に広まっている占いなど、根源に宗教観をもつ行事は多くあります。一見異質な神様・仏様をまとめて受け入れてしまつて、なんでも付き合うのが日本人のスタイルだと私はこの頃感じます。(一神教と多神教・汎神教の違い)

(3)お墓のことで、将来子供達に負担をかけたくないといわれることがあります。確かに相応の費用と手間を要するお墓を含めた祭祀は容易ではありません。私自身も父親の葬式では慌ただしいものでしたし、たくさんの方にお世話になり

ました。実はこの非日常の体験が当事者を鍛えていたり、感性を広げていくと後で気づきました。こうした出来事は、実は負担というより、継承者への期待の一つの形なのです。後継者の辿るべき重要な通過儀礼。そこには生きる力を育てるための意思と知恵が入っています。(かわいい子だからちょっと厳しいけれど鍛えてやりたいという親心?)

(4)お墓の建て方にもいろいろな考えがありますが、本当に悟った人にはたいした問題ではないでしょう。浄土真宗の開祖親鸞聖人は「閉眼すれば加茂川に入れて魚に与えよ」と最後に述べたといわれます。しかし残された家族と弟子達は、遺骨を大切に守ることを決意し立派な廟をたてています。人はどうしても形のない状態では、時々迷つてしまいます。そこで見えないけれど大事なことを見える形で伝えようとしているのがお墓だと思えます。

現世で悩みながら生きるなかで、物質である石とそこにある思想が組み合わされてお墓になっています。お墓は自分の人生をはるかに超えて残っていきます。そこに何を託すのか、また今まで何を託されてきたのかを振り返ってみることが大切なと感じます。

個人の命は有限ですが、世代を超える価値を伝えるお手伝いをする、そんな想いでお墓をつくりたいと願っています。

(本稿はあおもり草紙 平成二十四年四月号に掲載された文章に加筆したものです)